会津時代の直江兼続

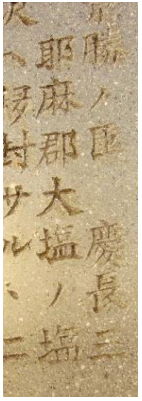
二〇一九年は没後四百年

永禄三年（一五六〇）新潟県南魚沼市の坂戸城下樋口兼豊の長男として誕生。『藩翰譜』では兼豊は薪炭吏。母は直江景綱の妹か泉重歳の娘ともいう。

元和五年（一六一九）十二月十九日、江戸の鱗（うこころ）屋敷（現警視庁）で病死。享年六十歳。

米沢徳昌寺に埋葬、徳昌寺廃絶後、東源寺に改葬されさらに林泉寺に改葬されます。

新田開発や青苧（カラムシ）を増産。北塩原村の大塩温泉では山塩開発（子孫が会津若松市河東町に住む）、鉱山開発も進めます。



「慶長三年」「大塩の塩役」とある子孫の墓碑銘

「愛」は戦の神・火伏の神の愛宕神社をモチーフ。または愛染明王ともいう。会津時代の愛宕神社は旧愛宕町（宮町）にあり現在は会津若松市東山町慶山にあります。

天正九年（一五八一）上杉景勝の側近、直江信綱が殺害され、景勝の命により、直江信綱の妻であった船の婿養子となり、直江家を継ぎ与板城主（長岡市）となります。

天正十二年（一五八四）兼続は内政外交を担う執政とります。そのころ景勝は「御屋形」さま、兼続を「旦那」さまと呼ばれます。

天正十八年（一五九〇年）豊臣秀吉の小田原征伐に景勝とともに出陣し、東京都八王子市の八王子城を攻略します。八月、豊臣秀吉の奥羽仕置きに随行し、景勝、兼続は会津に入ります。

文禄元年（一五九二）文禄慶長の役で、景勝と共に参陣、韓国釜山に上杉氏としては初の本格的な石垣の城となる熊川倭城を築城します。

慶長三年（一五九八）秀吉の命令で、越後から会津一二〇万石に加増され移封。兼続は出羽国米沢六万石（配下を含めると三十万石とも）の所領が与えられます。兼続の会津若松での屋敷は、山鹿素行生誕の地（会津若松市山鹿町）にありました。

兼続は、新たに神指城の整備を進め、越後の雲洞庵を移し会津若松市高野町界沢に「東雲寺」を建てます。上杉家菩提寺の林泉寺は若松城下の南（現在宅地）に建てられます。上杉謙信の遺骸を納めた御堂は、越後の春日山から運び、若松城内天守閣西側に建てられます。さらに新たに御堂を会津若松市神指町の大江戸温泉の地に建築しましたが、一六〇一年の米沢移封に伴い未完成となり、材料は米沢に運ばれます。

兼続家臣前田慶次は米沢に行きますが、子は会津に残り、子孫は一六代目となり会津若松市に住んでいます。

慶長三年八月十八日（一五九八）秀吉が死去。

慶長五年三月景勝と兼続は、蒲生氏郷築城の若松城に代わり、神指城築城を開始、町割までしました。

上杉家を出奔した藤田信吉や堀秀治が上杉家謀反を訴え、家康に会津討伐を決意させた「直江状」が出されます。景勝は上洛を拒否し、兼続は佐和山（彦根）に蟄居していた石田三成と連絡を取り密談をします。

越後で一揆を画策し、家康と秀忠の東軍を迎撃するため、神指城の築城を中止し「幻の白河決戦」を立てますが、三成が早く挙兵したため、東軍の上杉討伐は中止となり、家康は関ヶ原へ向かいます。九月十五日関ヶ原の戦いとなり豊臣方は敗北します。（上杉氏・佐竹氏・相馬氏は豊臣方でした）

このころ、領内の道路と宿場を整備します。

兼続は最上義光の領地を三万人で進攻し山形県の畑谷城を攻略。長谷堂城と上山城を攻めます。長谷堂城攻めは関ヶ原敗戦がもたらされるまで続きました。

慶長六年（一六〇一）七月、景勝とともに上洛し家康に謝罪します。景勝は米沢と福島盆地が領地の米沢三十万石へ移封となります。

兼続は、米沢城下を整備、殖産興業、鉱山の開発、開墾を進めるため治水事業にあたり「直江石堤」を造り、実高は五十一万石となります。江戸時代の米沢藩の基礎を築きます。兼続は、徳川重臣本多正信の次男政重を婿養子にしますが後に解消し、子無く禄は藩に返し家は断絶となります。

若松城下の兼続屋敷跡。当時大手口だった北出丸北西、山鹿町に約五十間四方（約90m）でありました。

会津美里町の「向羽黒山城」を二年かけて大改修します。「向羽黒古墨之図」

図・写真・文　©石田明夫2019　問合せ　TEL・Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索。